

## 平成29年度 電磁波加熱技術部会見学会 株式会社 ミロク製作所 見学記

- 1.日 時：平成30年2月7日（水） 13時30分～15時
- 2.見学場所：株式会社 ミロク製作所 本社工場
- 3.説明者：取締役 銃砲事業本部 本部長 眞島 様、  
生産技術部 部長 小松 様、生産技術課 課長 森田 様、設備課 課長 中村 様  
製造部 部長 赤星様
- 4.出席者：10名（事務局含む）
- 5.概要

午前中に、株式会社太陽殿 本社工場で耕うん爪製造の現場を見学し、午後、株式会社ミロク製作所 本社工場に伺った。株式会社ミロク製作所は株式会社ミロクグループの中で猟銃事業の中核をなす会社。

始めに会議室で、眞島本部長から沿革、事業や技術などの説明を受けた。創業は古く、高知にて創始者 弥勒蔵次氏が猟銃の生産を始めた1993年(明治26年)である。昭和に入って捕鯨砲の製造も始め事業を継続してきた。戦後一時銃の製造を禁じられていたが、1951年(昭和26年)に通産省から猟銃等製造事業の許可を受け猟銃製造を再開、米国ブローニング社との提携、猟銃製造技術を基にした工作機械事業(ガンドリルマシンなど)や木工製品事業(木製ステアリングハンドルなど)への事業拡大を経て今日に至っている。

製造技術としては「ゼロ嵌合」。火薬の爆発の衝撃に耐えるため銃身とレシーバーの合わせ面(銃の元折れ部分)は隙間なく嵌合していなければならないが、熟練工の加工・調整により、精密な彫刻の中にあるはずの接合線が全く見えなくなるほどの精密な嵌合に仕上げる(図1)。これにより、気密性はもとより、10万発撃ってもびくともしない銃に仕上がる。

その後、製造工程に沿って工場内を案内していただいた。ガンドリルによる銃身の孔明け、銃身に通る光を見て素早く正確な曲がり直し、電気炉による2連銃身の銀ろう付けへと進む。銃身と機関部にレーザーでナンバリングしてセットが決まるところから熟練者が「ゼロ嵌合」にするのだが、手際良さと力強さには目を見張った。その後、多くは胡桃の無垢材から作る銃床と組合せ、調整し、仕上げる。高圧弾での試射を経て弾着試験と最終検査を終えて完成。

どの工程でも熟練した精密さが要求されるが、比較的若い方が多く、またその作業の素早さには一同驚いた。

技術の高さに感銘を受けたことは勿論、「正直・誠実」を企業理念とされていることからか、芸術的な仕上がりときびきびした現場に委員一同大変爽やかな気持ちになり、捕鯨砲模型前で集合写真を撮影してミロク製作所殿を後にしました。



図1 二連銃と機関部の精密で美しい彫刻(株式会社ミロクホームページより)

URL ; [http://www.miroku-jp.com/gun/bc\\_miroku/index.html](http://www.miroku-jp.com/gun/bc_miroku/index.html)



写真1 会議室での説明



写真2 創始者弥勒蔵次氏の像



写真3 捕鯨砲モデルと一緒に